氏　　名　菅井紫野（すがいしの）
学位(専攻分野)　博　士（人間・環境学）
学位記番号　人博第310号
学位授与の日付　平成18年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科人間・環境学
学位論文題目　漢字における意味機能の有縁的発達
——<手の記号>と<足の記号>を中心に——

論文調査委員　（主査）教授 山梨正明　教授 東郷雄二　教授 阿辻哲次

論文内容の要旨

本論文は，手の記号と足の記号を中心とする漢字の意味機能の有縁的な発達過程の実証的研究である。本論文では，『説文解字注』の資料の綿密な分析に基づき，手と足の記号を中心とする漢字の体系が，どのように発展し拡張されてきたかを，記号論と言語学の枠組みに基づいて考察している。全体は三部から成る。

第一部の第一章では，素形から成る基本形，基本形に他の記号要素が組み合わされた応用形，基本形とは別に手の形を示す特殊形の三分類に基づいて，手の記号の意味機能の発展過程を分析している。特に，本章では，これらの手の記号の下位類のうち，基本形の中核を成す四つの素形によって特徴づけられる手の記号の具体的な形とヴァリエーションの分析がなされる。第二章では，手の記号にかかわる漢字の体系を，意味分化の動機となる手の記号の役割と機能に焦点を置いて検討する。この記号の意味役割と機能に基づき，本章では，手による保持・所有を示す記号類，手による動作・行為を示す記号類，手の身体部位の指示性に基づく数・量の単位を示す記号類の意味分化の過程を分析している。第三章では，手の記号のうち，左右の手にかかわる記号（指を三本に略したA系統）と手偏にかかわる記号（五本指のB系統）を比較検討する。A系統は，甲骨文字と金文の時期において，手話と構造の上で統語的に関係しており，時空的な認識に動機づけられている点を明らかにしている。また，本章では，(i) 本来，左右の区別なく漠然と手の概念を表していた記号が，左手が特別の意味を担うようになり左手と右手の区別が生まれる過程，(ii) 三次元的な認知的制約が破られ，記号の正逆によって対立する意味を担う二次元的な手の記号が登場する過程を明らかにしている。一方，B系統の手の記号が使われる場合，そのほとんどが形声字の限定符であり，またA系統の主な意味である「所有」や「動作・行為」とは異なる意味を担っている点を明らかにしている。第四章では，本義を追究した許慎と本義からの意味変化を分析した段玉裁の意味解釈の批判的な検討を通して，手の記号の意味機能の発展過程を分析し，手の記号の基本的な意味が具象レベルから抽象レベルへと比喩的に発展していく意味拡張のプロセスを明らかにしている。その発展には，静的な側面（身体の一部としての手の発展）と動的側面（機能する手の発展）の二つの側面が指摘されている。

第二部の第一章では，『説文解字注』における小篆の足の記号の形が甲骨文字から大幅な変化を起こしている事実に注目し，許慎と段玉裁が試みている字形・本義の解釈を批判的に検討している。また本章では，足の記号を「足跡の形」・「膝下の形」・「股下の形」の三系統に分けて，小篆の足の記号の具体的な形とそのヴァリエーションの体系的な分類を行っている。第二章では，小篆の足の記号の意味機能を，手の記号と同じく，許慎と段玉裁の解釈を参考にして系統別に分析している。甲骨文字の「足跡の形」から発展した足の記号は，小篆に至るまでに著しく変形し多様化している。この系統の足の記号の意味は，①身体の構成要素，②足の形態を示すもの，③足の位置・配置を示すもの，④足の動作を描写するもの，⑤足による移動に関するもの，⑥その他，の六つに大きく分けられる。本章では，これらのうち，①・②・③は足の静的な側面，④・⑤は足の動的な機能に注目した記号系として区別している。また，本章では，「膝下の形」の系統に関し，次の点に注目している。一つは，この系統の足の記号が意味素となる場合，全てが形声字の限定符の役割を果たしている点，また，同様

の役割を果たす手の記号のB系統と同じく特殊な形をしている点に注目している。「股下の形」の系統の用法に関しては，①一般的な人体の代行，②特徴的な形態・機能を備えた人体，③人間に近い生き物の下半身，④高さや順序の基準，の四つを区分している。この系統では，「足跡の形」の用法が「あし」そのものの属性に集約されていたのと異なり，人体を常に念頭に置き，その一部である「あし」に着目した用法が主流であるという事実を明らかにしている。第三章では，『説文解字注』の解釈のずれの問題を検討している。象形文字としての漢字は，象形された事物の名称・属性をまず表し，必要に応じて意味の特殊化や一般化による拡張を行い，より複雑な文字の意味機能を発展させている。許慎と段玉裁は，一つの文字の字形について，多くの用法を整理・統合して，その文字の最初の意味（すなわち本義）をたどっているが，象形された事物から連想される意味は大きく飛躍し，他の事物の属性と錯綜する場合もある。字形の変化は，この様な意味変化の相互作用によって起こる。本章では，これらの事実に基づき，字形の解釈のずれは単に字形の類似性に起因するだけでなく，場所・空間の近接性（ないしは隣接性）の認知作用，部分・全体の対象認知，身体部位の配置や方向性の認知作用のずれに起因する事実を明らかにしている。第四章では，足の記号の意味分化の過程を綿密に分析している。小篆の足の記号は，単独で機能することが多いが，本章では，その用法を，名詞的用法（名称），自動詞的用法（移動・位置），形容詞的・副詞的用法（形態・速度）に基づいて体系化している。さらに本章では，小篆における足の記号が，比喩，換喩，提喩，等による概念のずらしによって表意機能を高め，より複雑な意味体系を構築していく過程を明らかにしている。

第三部では，アルファベットを主流とする欧米の形式と意味の恣意的関係を中心とする記号系の研究と，漢字に代表される形式と意味の有縁性を中心とする記号系の研究を比較検討し，本研究の意義と文字研究，記号研究に関する一般的な展望が論じられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は，手と足の記号を中心とする漢字の意味機能の発達過程を分析した実証的研究である。本論文は，特に身体部位の手と足に関する漢字の記号系の発展過程を，『説文解字注』の資料の綿密な分析に基づいて体系的に考察している。

言語学における従来の意味論の研究では，記号の恣意性によって関連づけられる記号系（すなわち，非有縁的な記号系）の意味変化と意味の拡張過程の研究はなされているが，記号の形式と意味の有縁性に根ざす記号系の研究は体系的にはなされていない。本研究は，人間の身体部位の手，足，等の身体的な経験にかかわる漢字の有縁的な記号系の発展のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。

これまでの漢字の発達過程の研究は，主に漢字の本義（ないしは字義）を追求するに際し，一文字ごとの意味の変遷を通時的にたどっていく方法を採っている。これに対し，本研究の独創性は，手の記号，足の記号といった漢字の下位の記号系に焦点を置き，これらの各体系内の関連する記号相互の意味変化と意味拡張の過程を通時的な観点と共時的な観点から綿密に探求すると同時に，手，足のそれぞれの下位の記号系が漢字の体系全体の中でどのような意味機能を果たしているかを明らかにしている点にある。近年の漢字学の研究分野においても，通時的な研究だけでなく共時的な視点の必要性が指摘されつつあるが，その研究の対象の大半は，個別の文字の分析が中心となっている。本論文では，研究の対象を手，足の文字の書記素の構成単位まで細分化し，それぞれの漢字の下位の記号系内部の漢字群の拡張関係と下位の記号系の相互関係を明らかにしている点に特に意義がある。

また，本研究は，時・空的認識に根ざす記号の配置・方向性・動きに基づき，五本の指を三本に略した手の記号と手話の統語的関係を分析し，漢字の記号系においても，手話と同様，事物の受け渡しを示す方向性の意味素の存在を明らかにしている。さらに，本研究は，手，足の漢字の綿密な事例研究に基づき，漢字の字形の変化が単なる書き順に即した直線化・簡略化によるものでなく，左右の手の区分，手偏の発展，等の事実にみられるように，意味を細分化するために記号の亜種を生み出すことにより，文字体系の全体の字形に変化が及ぶ事実を明らかにしている。また，本研究は，主に，手と足の記号を中心とする漢字の記号系の意味変化と拡張過程の解明を主眼としているが，この研究は，他の身体部位にかかわる漢字の発展過程の分析のための基礎研究として重要な役割をになう。

本研究は，次の点においても重要な意味をもつ。まず，アルファベットを対象とする欧米の文字学や記号論の研究が，形式と概念（ないしは意味）の恣意的な関係からなる記号系の分析を主眼としているのに対し，人間の身体部位にかかわる漢

字の有縁的な記号系の発展のメカニズムの解明を試みている。従来の漢字学は，古典を正確に読むために本義・字源を追究することを主眼としてきた。これに対し，本研究は，伝統的な漢字研究とは異なる視覚的（ないしは認知的）アプローチを導入し，漢字の記号系の意味変化，多義性，拡張のメカニズムの一面を明らかにすることにより，一般記号論や言語学の意味論にも通じる視点の拡大を図っている。さらに，記号の恣意性を前提とする従来の言語研究に対し，概念と記号の単語レベルの有縁性だけでなく，形式と意味の有縁的（ないしは非恣意的）な関係が，その記号系自体の拡張の方向性をも有縁的に規定している事実を明らかにしている。以上の点で，本研究は，漢字や手話といった有縁性の高い記号系の今後の研究に一つの検証の場を与えるものと言える。

本研究で指摘されている手と足の漢字の意味拡張のプロセスの中には，時・空的認識にかかわる身体部位の配置・方向性・動きに基づく意味拡張，具象的な概念からより抽象的（ないしは主観的）な概念への意味拡張，近接性・隣接性の空間認知（ないしは部分・全体の対象認知）に基づく意味拡張が指摘されている。漢字の記号系に関するこれらの意味拡張にかかわる事実は，現在，精力的に研究が進められている認知言語学の意味論と語用論の分野における意味拡張のメカニズム（特に，日常言語の参照点能力，比喩，換喩，提喩，等の認知能力に基づく意味拡張のメカニズム）の解明に際し重要な経験的事実を提供する。この点で，本研究は，言葉の創造性のメカニズムの解明を図る記号論と言語学の関連分野の研究に対し，その貢献度が高く評価できる。

本研究は，主に甲骨文字と小篆の書体に関するデータに焦点を当てて分析を行っているが，今後の研究の方向としては，さらに同様の手法に基づく他の書体に関する分析が期待される。漢字は，形・音・義から成立している。本研究は，字形と意味の結びつきの分析を試みたが，音韻的側面からの検討も必要となる。これらの研究は，今後の課題として残される。

本申請者が所属する環境情報認知論講座の目的の一つは，言語，知覚，思考，推論，等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが，本研究は，この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に，今後の言語学と文字学を含む記号論の関連分野への貢献がさらに期待される。

よって

本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成17年12月12日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果合格と認めた。